

# － 卷 頭 言 －

## 恵泉園芸の再生のために

学長 大口邦雄

恵泉女学園大学と園芸短期大学との統合が成った。「統合」という言葉には、短大がつちかってきた園芸が継承発展されることへの、学園関係者全員の強い願いが込められている。しかし、事実を真摯に見つめてみよう。恵泉女学園は園芸短期大学の廃止を文部科学省に届出る。それが真実である。

直接的には、財政赤字が原因であるが、そもそも赤字を重ねることになった原因について、われわれは十分考えてみなければならない。園芸短期大学は、確かに恵泉の伝統的教育理念に最も忠実であった。しかし、それが閉じられた世界だけの評価では、学生は集まらない。これが現実である。

失われたものの復活。これは多くの人の願いに違いないが、いったい復活すべきは何だろう。園芸とキリスト教とが結びついた教育は、確かに園芸短期大学の特徴だったが、この結びつきは必ずしも必然ではない。キリスト教信仰なしに、園芸を学べないわけではないからである。キリスト教が精神的基盤をなすことは、恵泉女学園大学の諸学科に共通の事柄である。恵泉においては、園芸が復活すれば、学ぶ者の精神的基盤として、キリスト教信仰が影響するであろう。結局の所、われわれは一旦キリスト教とは切り離して、純粹に園芸とは何かという問題を思考するところから始めるべきである。

「園芸」という言葉が、われわれ日本人の間で定着したのは恵泉園芸生活学科の功績ではないかと思う。私は、学園長に就任して、園芸短期大学の抱える問題に直面し、その将来をどうすべきか真剣に悩み始めた頃、斯界の権威者と思われている3人の方々の率直な意見を伺った。世にいう「園芸」は真の園芸から外れつつあるとの懸念を示され、これを正道に引き戻し得るのは、恵泉だけだろうという意見であった。いったい「真の園芸」とは何か、それは「恵泉の園芸」と同義語か、また、「恵泉の園芸」とは「園芸

短期大学の園芸」を意味するのか、といった問題がわれわれの前にある。

人間はものを考えるとき、無意識のうちに自らの経験を基礎にして思考する。短期大学の園芸とは何か、というとき、多くの人は多分無批判に、自分が学んだ園芸のことを考える。これは極自然なことと言わねばならない。世代が異なると、実は自らが学んだ園芸が、他の世代が学んだ園芸とは、どこかしら違っているかもしれない、というようなことは容易には自覚しにくい。

しかし、もし違いに気付いた者が、自らの園芸こそ真の園芸なりと主張し譲らなければ、園芸は日本の芸事が陥りがちな本家争いを繰り返すばかりで、西欧的な意味の学問にはなり得ないであろう。必要なことは、正統派争いを捨てて、自由な意見の表明と率直な討論であり、意見が異なっても、真理を求めようとする相手の意図に対する信頼や尊敬を持つことである。園芸文化研究所に関わる者は、それぞれの専門分野における研究や実践活動とともに、「園芸」それ自体の本質を問う問題にも関心を払い、寄与する責任があると私は考える。

理事会は、大学と短期大学との統合を決定する際、将来いつの日か、何らかの意味で園芸の名を冠する学科の創設を期待すると表明した。園芸文化研究所は、これを一つの課題として、研究してもらわなければならない。すなわち、園芸を専攻した者に学士号を授与するならば、いったいどのような体系立てられた知識を持ち、また技能(スキル)を持つことを保証するのかという問題である。

園芸を学ぶ者が、教養として園芸を学ぶ愛好家と、園芸の職業的専門家の2種類に分化する可能性もあるだろう。愛好家は、個人の庭と言う限定された環境下での園芸の知識以上のものは、あまり必要ではない。一方、専門家は、地域の違い、気候風土の違い、日当たり風通しその他局所的な地理的条件の違い、土質の違い、様々な病気や、他の植物との共生など、あらゆることにひと通り対応できる知識を必要とするだろう。愛好家は広く存在するであろうが、専門家に対する需要は、そう多くはないのかもしれない。

園芸の専門家たちは、いったいどのような職種と結びつくのだろうか。今日のような少子化の時代でも、たとえば看護師や介護士、保母など、確実な職業に結びつく学校は、たとえ短期大学でも、多くの学生を依然として惹きつけている。園芸はこの点では及ばない。我が国においては、まだ、そのような職種が定着していないのであれば、長期的には園芸の分野において、権威ある新たな職種の創出を真剣に考慮しなければならない。

当面それには時間がかかるなら、主専攻の分野で職業を持ちつつ、職場や家庭において、副専攻として学んだ園芸を活かすという道も考えられよう。この場合、イギリスにみられるように、子育てを終えた女性や、あるいは一旦別の職業についた人が、園芸を専門とする職業に転業する(キャリアチェンジ)可能性を、制度的に保証する努力が合わせて必要になるであろう。すなわち、18歳人口を対象とする教育プログラムのほかに、非常勤学生を対象とする成人教育のプログラムを準備する必要があるのである。

こう言ったプログラムに適応するカリキュラムとはどういうものか、検討を要する。教員の専門をカリキュラムに持ち込むということでは、問題は少しも進展しない。他方このような教育プログラムに興味を寄せる学生とは、どのような学生か、社会学的な分析を要する。これまで園芸短期大学では、「生産園芸」すなわち農学への偏向はなかっただろうか。恵泉で学ぼうとする人たちが求めていた園芸は、むしろ「家庭園芸」、言い方を換えれば「市民園芸」ではないのか。誰が園芸を学ぼうとするのか、その社会層はどこか。これは実は、園芸とは何か、という問題とある意味で密接に関連する問題でもある。

園芸には、もっと広い境界領域が存在するかもしれない。私が年来疑問に思うのは、イギリスをはじめヨーロッパの町や、ことに農村の美しさに比べて、なぜ日本の町や村が美しくないのか、という問題である。学校のキャンパス一つとっても、日本の学校のキャンパスは、教室も校庭も、実に殺風景で殺伐としている。恵泉は、それに比べて格段によいとはいうものの、一度たとえばイギリスの伝統あるカレッジに行ってみるならば、ま

だまだ理想からは程遠いことを知るだろう。

河井先生が園芸を教育に取り入れることに思い至った契機の一つは、ミス女学校で校門から建物の玄関に至る小道の両側に花を植えた経験である。学校創設を思い立って、イギリスのスワンレーの園芸学校を訪れ、その後デンマークを訪れたときのことが「わたしのランターン」の第15章に見えるが、それは建物や庭や室内装飾などが一体となった美しさに対する驚きと憧憬であった。これは、生活の中に美しい環境を創造するという、音楽や芸術とも一体となって結びついた人間の文化的営みの中の園芸であり、しかも、そのような感じ方、考え方は、もともと恵泉の心の一つにあったのである。

こういう園芸について語ろうとすれば、従来の狭い領域の中で考えられた園芸からは出て来ない問題領域に踏む込むことになるだろう。それは豊かさを求める人の心の問題や、人と自然がいかに共生すべきかという環境問題とも、深く関連することになるだろうと思われる。われわれの前には、広大な可能性が広がっている。

園芸短期大学が廃止されたことは残念なことに相違ないが、しかし、これまでとは一線を画する新たな園芸の概念を打ち立てる好機にもなり得る。それが本当に日本の将来に貢献するものであるならば、自ずと園芸を志す者は増え、園芸は復活すると私は考える。 (学長兼学園長)